

# 神河町には鉱山がたくさんあった

神河町史調査員(地質) 橋元 正彦

神河町では現在、越知谷鉱山(越知)と福山鉱山(福本)の2つのろう石鉱山が操業しています。どちらも明治の初めに開発された鉱山です。これ以外に、かつては銅・鉛・亜鉛などを産出した金属鉱山が数多くありました。今回の調査で、川上に7つ、大川原・猪篠・新田に1つずつの金属鉱山跡が確認できました。

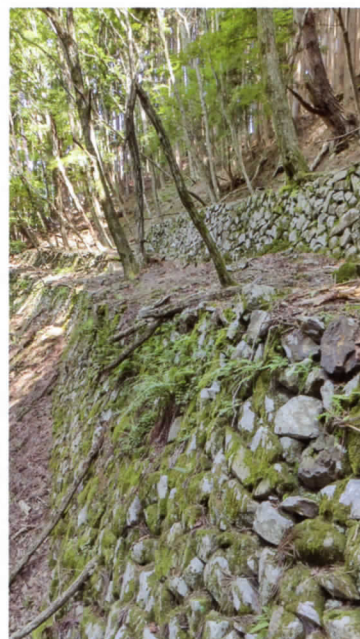
## 1. 平石<sup>ひらいし</sup>鉱山

平石鉱山(川上)は平石山の中腹にあり、スギ林の中の山道を登っていくと、斜面の上に石垣が現れます。石垣は二段になっていて、下段は長さが80m近くあります。山の中に残る長大な石垣は、まさに産業遺産です。石垣に沿って道がつくられ、坑口から<sup>こうぐち</sup>鉱石をソリに乗せて選鉱所へ運び、不要な石はトロッコで隣の谷へ運んで落としていました。坑口から急な斜面を登っていくと、山神社が祭られていたところがあり、そこに<sup>ちようずばち</sup>手水鉢が残っています。手水鉢には「大正七年(1918)五月一日」の銘があることから、平石<sup>かこう</sup>鉱山は大正期には稼行していたと考えられます。

坑口の近くでは、いろいろな鉱物を見つけることができます。黄銅<sup>おうどうこう</sup>鉱は金色に光り、一部が虹色にさびています。閃亜鉛<sup>せんあえんこう</sup>鉱は黒色で、強く光を反射します。電気石は、針のように細長い結晶が放射状に集まっています。孔雀石は鮮やかな緑色です。鉱物を調べると、この鉱山がどのような金属を産出していたかがわかっていきます。



▲平石<sup>ひらいし</sup>鉱山の黄銅<sup>おうどうこう</sup>鉱(中央)と閃亜鉛<sup>せんあえんこう</sup>鉱(左)



▲平石<sup>ひらいし</sup>鉱山の石垣遺構

## 2. 琢美<sup>たくみ</sup>鉱山・丈山<sup>じょうやま</sup>鉱山・福畑<sup>ふくはた</sup>鉱山

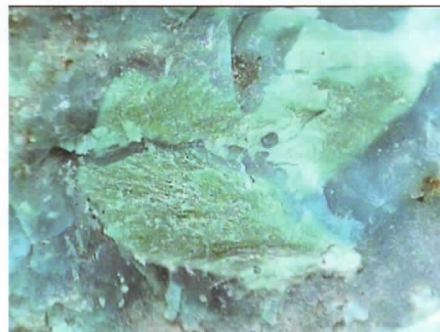
琢美<sup>たくみ</sup>鉱山(川上)は、粘土を丸めた「よせき」を焼いて砒素を採っていました。丈山<sup>じょうやま</sup>鉱山(川上)は、道も消えた山の上に今も坑口がぽっかりと開いています。福畑<sup>ふくはた</sup>鉱山(新田)のズリ(捨て石場)では、孔雀石やプロシャン銅<sup>ひそ</sup>鉱、青鉛<sup>せいえんこう</sup>鉱などの銅や鉛が水や大気と反応してできた鉱物が見られます。

かつて鉱山では、地元の人が多く働いていました。子どもたちは遠足で鉱山を訪れ、大きな建物や機械に目を見張り、親や近所の人たちの働く姿に接しました。

鉱山は、産出した金属によって日本の近代化を支え、地元の人たちの生活基盤となっていたのです。



▲丈山<sup>じょうやま</sup>鉱山の坑口



▲福畑<sup>ふくはた</sup>鉱山の孔雀石(緑色)と珪孔雀石(青色)

## 『神河町史』の編さんを行っています！ VoL 6

今月の広報では、8月号に続き令和6年度刊行予定の神河町史第1巻『自然・地理編』の地質調査でわかったことについて紹介しています。

日本遺産に認定されている「銀の馬車道いくのこうざんりょう（正式名：生野鉦山寮ばしゃみち馬車道）」は、今から約150年前の明治時代の初期に造られた、生野鉦山から採掘された銀などの鉦物を含む鉦石などを姫路港まで運ぶための道でした。これは、鉦物資源大国日本の記憶をたどる道です。

かつて神河町の山々から採掘された、多くの金鉦石も日本の近代化に貢献していました。

今回は、神河町史編集委員の橋元さんに神河町の鉦山について詳しく書いていただいています。「歴史文化遺産特別ニュース」15ページをご覧ください。

神河町の歴史文化遺産

